
かいごう
海郷の章

『ラストクロニクル』ショートストーリー

滝 舜一

夜の海には魔物が潜むという。しかもこんな嵐の夜ともなれば、どんな魔物が現れるか、知れたことではない。だからこそ、彼はひどく後悔していた。こんな嵐の夜に外出しなければよかった、修繕中の漁船の様子を見になんてくるんじゃないなかつた……。

ゆうに漁師小屋三つぶんくらいの大きさはある、その巨大な影。そいつが立ち上がり、同様に小船の一艘くらいは余裕で掴めそうな鋏を振りかざした瞬間、彼——ユキノ村の漁夫は、まるで大蛇に睨まれた青蛙のように動けなくなった。嵐の浜は冥府のように暗い。細槍の穂先のような豪雨が、蓑と笠に当たってバタバタと音を立てる。それを彼の耳は、どこか他人事のように聞いていた。まさに悪夢のようだった。死ぬ前に年老いた母親に何かしてやりたかった、恋焦がれていた船主の娘に、想いのひとつも告げておくべきだった……。さつきとはまた異なる、無数の後悔が心中を駆け巡る。彼は観念し、ゆっくりと眼を閉じた。

……だが、いつまで経っても終わりはやってこない。彼はふと気づいた。いつの間にか、その巨大な影のそばに、誰かが立っている。その影より遥かに小さいその人物は、片手をあげて巨大な化物に対峙している。その手のひらが青い光を発して

いた。彼にはまるで、それが化け物を制しているかのように見えた。すると驚いたことに、小山くらいはあるその化け物はたちまち大人しくなり、巨大な鋏を下ろす。

彼はひきつった顔で、その人影へと視線を移した。同時にあっちのほうも彼の存在に気づいたのだろう、ゆつくりと黒いフードに覆われた顔をこちらに向けてくる。途端に、凄まじい音が空気を揺らした。近くの岩場に落雷したのだと気づくのに、少しかかった。轟音が鼓膜を叩き、雨音はほんの一瞬だけ遠のいたように思えた。だが周囲を覆った白い光の中で、漁夫の視線はさまようことなく、その人影に釘付けになっていた。それは、おそらく「人」のものではなかった……よく見ると、フードの中からは二本のねじれた小さな角が覗き、陰になってよく見えない顔の中から、そこだけはらんらんと光る瞳——まるで夜釣りのときに点す松明のように燃える、真紅の瞳が彼を見つめていた。

「ひっ……!!」

同時に、彼の口から小さく声が漏れる。途端に、身体が自由を取り戻す。尻を

地面につけたまま、怯えた小エビのように後ずさりし——腰を浮かす。するとその無様な姿を笑うかのように、その人影の口元が小さく歪んだ。同時に彼は見た。まるで北方の黒狼のような二本の白い牙が、その唇から確かに覗いたのを……。

次の瞬間、ようやくきちんと腰に力が入った。雷雨の中、彼はまさに這うようにして立ち上がり、雨を吸ってすっかり重くなった砂浜をよろめきながら駆け出した。

※※※

イースラの空は今日も青い。水平線の彼方、空と海が混ざり合う場所が遙かに霞んでいる。白く泡立つ波が黒く濡れた砂浜に無限に打ち寄せ、するするとほどけては、静かに消えていく。そんな中、少女がひとり、海を見つめていた。長い黒髪の根元を紅の紐で結び、白衣に群青で縁どられた巫女装束に身を包んでいる。腰には鞘に収められた大太刀を差し、袴は深い藍色である。その色合いは、武者

巫女としてはまだ駆け出しであることを示している。

(私、もう十八になる……)

彼女、ミズキは心の中でそつと呟いた。

目を閉じ、ぎゅつと手を握り締める。水平線の向こうをきつ、と見据えてみる。明日からの私は、昨日までとは違う……いや、変えてみせる。今、彼女は胸にそんな大きな決意を秘めていた。

「やつと見つけた……また、ここなの？」

ふと、澄んだ声。思わず振り向いたミズキだったが、そんなことをする前から、声の主はすでに分かっていた。

親友のリンである。背丈はミズキと同じくらいで、やつぱり駆け出しの氷結術士だ。ミズキとは、都にやってきたとき初めて入った甘味屋で、ひよんなことから知り合って以来の仲である。お互いに「おのぼりさん」だった当時から、もう数年が経つ。

「やっ」

軽く片手を上げて、気さくに声をかけてくる。リンは、氷結術士にしては陽気な娘だ。

「また、考え事？」

「うん、まあね」

「ふーん……当てて見せようか？」

リンが悪戯っぽく微笑む。きりつと墨を引いたような眉の下、青玉のような涼しげな瞳がミズキを見つめる。ちよつと吊り眼気味で、はつきりした顔かたち。リンの右目の下には小さなほくろがあつて、顔立ちにちよつとしたアクセントを添えている。この親友は、ミズキの目から見てもなかなかの美人だと思う。ミズキは正直、自分の目の形があまり好きではない。大きさは合格だと思うのだが、目尻が少しだけ垂れていて、どうしてもおつとりしたお嬢様風に見えてしまうからだ。まあ、実際に自分がお嬢様育ちだという自覚はあつたが……そもそも清貧を旨とする修行中の武者巫女とはいえ、本当の自分が、東の島の田舎貴族の娘だという出自までは変えようがない。だが今の彼女にとって、その出自自体が、大

きな重荷でもあった。

そんなミズキの心中を知ってか知らずか、リンはお構いなしに言葉を続けた。

「青武皇様のお触れの件でしょう？ ユキノ村の化け物退治……ホントに討ち手として名乗り出るつもりなの？」

ミズキは、ちよつと驚いてしまった。この親友は氷結術の才能はそこそこレベルだが、ときどき妙にカンがいいのだ。

「うん……その通りだよ。でも、どうして？」

「カンだよ。……本当は、この前町に出たとき、辻のお触れ書きをじつと見てたでしょう？ それで、なんとなく」

(まったく、リンにはかなわないな……)

心の中で、ミズキはため息をつく。ただ、どちらかというと、自分があまりに落ち着きがないせいで、心の動きがすべて表に出てしまっているのではないか、という不安も覚えた。

「腕に覚えのある武者様ならともかく、気弱なミズキにしては珍しいなって思っ

てさ。でも、本当に本気？」

「……どういうこと？」

「あのさ、ミズキは……今の自分の腕前で、ホントにその任務が果たせると思ってる？」

少々内気で人見知りするタイプのミズキと違って、リンはいっだって真っ直ぐな物言いをする。出は南方の港町の酒屋の娘だというが、ふたりは気質も生まれも違うのに、初めて会ったときから妙に馬が合った。

「……危ないよ？ 聞いた話じゃ、小山みたいな大きさの化物に赤い瞳の魔物使いまでも一緒だっていうんだから。バストリアあたりから流れてきたんじゃないかって、もっぱらの噂だよ」

「でも……やってみたいんだ。私」

リンに面と向かって口には出したくないけれど、いくつかの理由がある。何より、ミズキは自分を変えたかったのだ。ミズキは再び、唇をきゅつと噛み締める。リンと会話しながら、彼女はもう何度目かになる、数週間前の出来事を思い出し

ていた……

「あなたはこの神職に、まるで向いていませんわ。資質もない、覚悟もない……法術の技も剣の腕前も、未熟すぎます」

頭上から、冷徹な声が降ってくる。竹刀を持ち、鉢金の上の乱れた髪をかきあげつつ、ミズキを見下ろす黒い瞳。シイナはイスラの遙か北、マジュラ沖の近くの小国からやってきた、下級神官の娘だった。剣術の訓練中、練習試合でミズキとあたったシイナは、容赦なく彼女を打ち据え、文字通り叩きのめしたのだ。

彼女には、確かにエン・ハに仕える武者巫女としての自覚と覚悟があるようだった。そして、剣の才能も。けれど何事もきつく当たってくるところがあつて、ミズキは彼女のことを苦手だった。彼女はいつだつて、ミズキの痛いところを的確に突いてくるのだ。どうやら彼女にとつても、お嬢様育ちが抜けないところがある。ミズキの気質が、苛立たしいようだった。もちろんミズキのほうも実際に、どこか拭いきれない自分の甘さは自覚していたのだが……それでも、面と向かつて己の不甲斐なさを思い知らされるのは辛いことだ。悔しさと無念さがごちゃま

ぜになつて、自然に溢れ出てくる涙。ミズキはそれを慌てて手の甲で拭いながら、ゆつくりと立ち上がろうとした。そこに再び、シイナの冷たい声がかぶせられる。「……また。泣けば、己の未熟さが許されるとでも思っているのかしら？ だいたいあなたは心構えが甘いよ。もうお国へ帰つたらどうですか？」

違う、と声を大にして言いたかった。決して己を哀れんで涙したのではない、己の力のなさど不甲斐なさが悔しかったのだ、と。けれど……いつものように、ミズキはうなだれ、唇を噛み締めることしかできない。何も言い返せない自分をもどかしく、なのに、まったく言葉を紡ぐことができずにいた。

試合が終わつたあと、仲間たちは気の毒そうに慰めてくれたが、その同情の眼差しさえもが、ミズキにとつては心を刺す針のように感じられた。

宿舎に戻つて寢床に入ると、自然に唇がわななき、再びじわりと涙が浮かんだ。慌ててそれを拭いながら、ミズキはじつと布団にくるまって身体を震わせつづけた。

（どうして、自分はこうなんだろう。もっと、もっと私に力と自信があれば

……)

あの日以来、寝る前にいつもあのときのことを思い出してしまふ。そんな日々が、もうしばらく続いていたのだ。

「正直、ミズキの腕じゃ心配だなあ。相手は化物だよ？ 手加減なんてしてくれないし」

「分かってる。でも……」

「ふうん？ 何かワケありっぽいね」

それきり黙り込んでしまったミズキに、リンはそれ以上質問しようとしなかった。その代わりに、今度は彼女のほうが意外なことを言い出す。

「覚悟、変わらないみたいだね？ ……じゃあさ」

私が付き合っただけあげる。リンはミズキの顔を覗き込んで、はっきりとそう宣言した。

「危なっかしいからね、あんただけじゃ」

ミズキは驚いて、両手を胸の前で振った。

「え、いいよ、そんな……だつて、危ないもの」

だがリンは、そんなミズキの態度をものともしないようだった。

「なに言ってるのよ、水くさいなあ。それに、あんたひとりで行かせるほうが危ないよ？ いいつて、明日、お師匠さんに言つて、宮廷の文官様に取り次いでもらうから。いつか宮中に古い友達がいるつて言つてたんだ」

リンの師匠は、少しは名の知れた女氷結術士である。実家の父親のつてで、なんとか弟子入りできたのだという。

「で、でも……」

自分の勝手な決心に友人を巻き込みたくないミズキは、言いよどむ。

「気にするなつて。だいたい、私たちさ」

そこまで言つたあと、リンは少し笑つた。

親友、でしょ。

確かにそう、リンは言つた。一瞬きよとんとしたあと、ミズキの顔に、次第に大きな笑顔が広がっていく。小さい頃から引つ込み思案で、お嬢様育ちというこ

ともあいまって、近所の子供たちの輪にも入れてもらえなかった……そんなミズキにとつて、それはあまりもらったことのない、嬉しい言葉だった。

「あ、ありが……」

その言葉を、口に出しかけた途端。

「あ……！」

ふと何を思ったか、リンがいきなり走り出した。頬が少し上気しているのを隠すかのように、全力で波打ち際に駆け寄っていく。リンはすばしこくて、駆け足が得意だ。たちまち目指していた場所にしたどり着き、何かを拾い上げる。そして、満面の笑顔で片手で掲げてみせる。彼女の白い手の中で、夕日を浴びた小さなものが、茜色に照り輝いた——おそらく、虹色宝貝だ。装飾品などにも加工される珍しい貝殻である。まるで珍しい玩具を見つけた子供のように、笑顔になるリン。彼女が手を振ると、波打ち際に長い髪が揺れる。ミズキも笑顔で応え、そちらに駆けていきながら、改めて胸中でそっと呟いた。

（ありがとう、リン）

※※※

朱塗りの柱が立ち並ぶ中、磨かれた床には赤い絨毯が敷かれていた。そばには、最高級の花が活けられた豪華な花瓶と、いかめしい武者鎧が鎮座している。ここはイスラの宮中、青武皇との謁見の間である。その奥に周囲を圧するように据えられているのは、珊瑚や宝石で飾り立てられた玉座だ。そこには、五十代初めの男が座っている。豪華な衣装に立派な口ひげ。彼こそは、イスラを治める皇帝、青武皇その人であった。

だが今、青武皇は少々苦い表情をその顔に浮かべていた。玉座から離れ、少し段差がついた床の上。赤い絨毯が敷かれたそこには、見習い武者巫女の少女と、その親友だという氷結術士の少女が頭を下げて片膝をつき、イスラ風の流儀でかしこまっている。

彼は困ったときの癖で、人差し指と親指で伸ばした口ひげをねじりあげると、

ううむ、と一言唸った。

「そなたらの熱意は嬉しいが……しかし」

見たところ、二人とも未熟そうである。もつとも態度については、氷結術士のほうは堂々としたもので、彼もその度胸に感心するほどだ。ただ、彼の告知に応える形でこの謁見を申し出た本人らしい、もう片方の武者巫女のほうは、かなり緊張しているようだった。さつきから、大事なところになると何かと声が震えがちになるし、彼が少し質問を返すとしどろもどろになり、顔色が赤くなったり青くなったりする。そのたびに氷結術士の少女につつかれたり、口添えしてもらったりしている様子が、ほほえましさとともに、率直に言っただけ頼りない印象だった。それに、この任務は海賊退治や盗賊狩りなど、通常のものとは少々勝手が違う。何しろ得体の知れない水妖が相手であるのだから。

(やはり、ここは)

口ひげをしごきながら、青武皇は考える。むざむざこんな若い娘たちを、化け物退治の任務に送り出すこともなからう。北西の大国ゼフィロンとの国境争いの

ため、皇軍の主力が出払っているとはいえ、イースラに人がいないわけではない。それこそ、他に屈強な海兵たちだっているのだから。

(とはいえ、一応もう少し話を聞いてみるかのう……)

そんな思いで、彼はまたいくつか質問を投げかけてみる。たちまち武者巫女のほうは泡を食ったようにうろたえはじめ、代わって氷結術士のほうがはきはきと答える。

(これでは、どちらが言いだしっぺなのか分からぬな……)

やや呆れた心持ちで、彼は冠の下の白くなり始めた髪を、そつと人差し指で掻いた。

ミズキは、ひたすらに胸中で(落ち着かなきゃ)と繰り返していた。ともすれば頭が真っ白になりがちなところを、リンに折につけ助けてもらっているのにも、自分で気がつかない有様だ。もう何度目かの問答を繰り返し、さまよわせた視線が、ふと青武皇の顔の上に落ちた。小首をかしげ、やや眉を寄せた表情。

(あつ、これは……)

小さい頃、海辺で見つけた海馬の幼獣を連れ帰ったとき、父親が見せた表情に近いものがある。結局、小さいとはいえ水妖の眷属を陸の上で飼うわけにはいかない、というのが父親の判断だった。その後、ミズキは泣く泣くその可愛らしい海馬の仔を海に放してやったものだが……。

（ダメだ……断られてしまう）

とつさに悟った彼女は、固く目を閉じた。心の隅から、絶望感が湧き上がってくる。

（結局、私なんかじゃ……強くなる機会さえ……）

いけないとは分かっていつつ、弱気な考えが頭をもたげる。さきほどから大いに緊張していた反動か、まるで穴が開いた紙風船のように気力が全身から抜けていく。彼女ががっくりとうなだれたそのとき。

「帝、少々お待ちくださいませ」

銀の鈴を鳴らしたような、涼やかな声音だった。ミズキはもちろん、リンもはつとして声がしたほうを振り返った。謁見の間の入り口から、颯爽とした武人が

歩み入ってくる。驚いたことに、女性である。背丈はそう高くないが、上質そうな鎧ごしにも分かる、しなやかで隙のない物腰。長い黒髪には一輪の花が結わえてあり、全身にまとう凜とした雰囲気、一片のやわらかさと華やかさを与えている。肌は白く、面立ちは小作りだが瞳が大きく、睫がはつとするほど長い。また、おそらく剣以外にも何かの作法を深く心得ているのだろう。一挙手一投足、あらゆる举措に無駄がなく、玉座に続く赤い絨毯の上を歩く姿までが美しかった。「さしでがましいようですが、一部始終をお聞きしまして……」

「おお、イズルハか」

その優雅な女武者がお気に入りであるらしく、青武皇が嬉しそうに言う。

(えっ、この人が……!?)

ミズキは絶句した。リンも目を丸くしている。イズルハといえば、皇の身边を警護する衛士の中でもイースラ中に名が知られた、武人の中の武人ではないか。ミズキたちの動揺を気にする様子もなく、イズルハはつかつかと歩み寄り、手のひらを組んで一礼すると発言を続ける。

「率直に申しまして、わたくしはこの者たちに、ユキノ村の一件を任せてみてはいかがかと思うのです」

「な、なんじゃと……？」

この提言にはミズキたち同様、青武皇も大いに驚いたようだった。

「帝がご不安に思う気持ちも分かります。ただゼフィロンとの戦いはますます激しくなることが予想され、ミフネ將軍やユエン殿など、イスラの誇る軍も国境から動けぬまま……。今こそ、我がイスラは国の未来を担う勇士を育成していかなければなりません。これはひとつの大きなきっかけになる、そう感じるのです」

「ふむう…」

さらにイズルハは、よどみのない口調で続ける。

「どうしてもまだ迷いが消えぬとおっしゃるなら、恐れながら」

次の瞬間、ミズキの目が大きく見開かれた。イズルハはこともなげにこう言ったのだ。

「私が彼女たちに付き添い、共に化物退治に向かいますよ」

青武皇も驚いたようで、せわしくなくひげをしごきながら、困ったような顔になった。

「むむ？ し、しかしのう、お主にはこの皇宮を護衛する任務が」

「ご安心を。その任務なら代理の者がおります。そう……蒼真勢のミスルギ殿な
どいかがでしょうか」

剣こそイズルハとは異なる流派だが、ミスルギもまた、蒼真勢でも一流と呼ばれる剣士である。彼女の名は、イズルハ同様にミスキも聞いたことがあった。

「私が出ている間、留守を任せるには適任かと思いますが」

「うむむ……」

「帝、ご決断を。……私の覇力の閃きも、これが今後の未来に大きな流れを作り
得る決断になり得ると、囁いておりますゆえ」

イズルハにここまで言われては、仕方がない。やがて青武皇は不承不承という
表情ながら、こくりとうなづいた。

(やった……！)

リンが満面の笑顔でこちらを見やる。ミズキもこわばった笑顔を返す。

(でも、なぜイズルハ様がわざわざ私たちを……?)

緊張がほどけるとともに、疑問と同時に不安が沸き上がってくる。ミズキは修行中の武者巫女、リンは駆け出しの氷結術士だ。お互いに外敵との戦いをその務めの一環とする以上、イースラ皇軍の事情には明るい。もちろん名高いイズルハのこともよく聞き知っているが、それはこちらだけの話である。どう考えても、イズルハとはこれまで、何かしらの縁ができたことはなかったはずだ。ましてや、自分たちをここまで買ってもらうほどの理由となれば、正直見当もつかない。

そんな疑問を感じつつ、ちらりとイズルハのほうに視線を動かした次の瞬間、ミズキの胸がドキリと鳴った。

イズルハが、その視線に反応したかのように、ミズキのほうをちらりと見たのだ。そして、一瞬だけ——微笑んでみせたのである。その微笑みは己への自信に満ち溢れ、ミズキにはそれがまるで、輝く満月のように眩しく思えた。次の瞬間、

自然にミズキの胸に熱い気持ちが始き上がってくる。

(なんて素晴らしい笑顔なんだろう。迷いなく、己への自信に満ち溢れた……この方のように、なりたい。まっすぐな太刀のような精神を持つ武人に……)

ミズキにとつては、自分の中に急に、どつしりとした柱で組まれた豪華な社が生まれたように思えた。

それは、憧れであり目標であり、道しるべだ。きっとそれは、自分の未来を支える大きな力へと繋がっている。そんな感覚と決意を抱いて、彼女はもう一度、イズルハのほうを見やった。彼女はすでに、旅の支度や段取りについて、青武皇に受け答えをしていた。さきほどの一瞬の笑顔が嘘であったかのように、その顔はもう、いつもの冷徹な武人のそれに戻っている。

※※※

ユキノ村は、イースラの都から三日ほど歩いた、西の海辺の小村である。三人

の旅路は順調だったが、ミズキはどうも困った事態に陥っていた。生来の内気さが祟って、イズルハと会話が成り立たないのだ。イズルハと言葉を交わそうとするとどうも緊張してしまつて、上手い受け答えができなくなつてしまう。

例えば、こんな具合である。

「ミズキ殿は、どうして武者巫女を目指されたのですか？」

道中で、イズルハがふと尋ねてきた。

「そ、それはその、あのっ……」

あたふたしながらミズキはが返そうとするが、言葉が喉の奥で引っかかつてしまい、うまく説明できない。たちまち耳たぶまで真っ赤になるのを、リンが見かねたように言葉を差し入れる。

「ミズキは、東のオウツ地方の領主様、カラド公の孫娘でして。エン・ハへの信仰篤きカラド公のご意志で、青武皇様とお国のお役に立つべく、都へ上らされたのです」

「あら、そうだったのですか。私も、出身は東国……オウツから少し離れた、二

「ビサトですよ」

「い、イズルハ、さ、様は……」

「はい？」

「あ、えっと、その、あのう……」

はて、と小首をかしげるイズルハ。

「あ、差し支えなければイズルハ様は、どのような事情で皇護隊士になられたのか、聞きたいのだと思います」

まるで通訳するかのようになり、リンが平然とした顔でミズキの意図を汲んでくれる。ミズキの顔が、たちまち再び赤くなる。実家が客商売という生まれのせいとか、高名なイズルハにもあつという間に馴染んでしまい、事も無げな様子で立ち回るリンのことが、これほど羨ましく思えたことはなかった。

「ああ、私ですか」

もう何度も尋ねられてきた質問なのだろう、イズルハはさらりとした調子で語ってくれた。彼女は、ニビサトの神官の娘として生まれたのだという。ミズキの

武者巫女仲間のシイナもそうだったが、イースラの王宮関係者には、そういった生まれの者が多い。

ただ、イズルハは幼少の頃から、神事よりも剣の道を好んだ。両親は最初彼女を武者巫女として育てようとしたのだが、彼女本人がどうしても聞き入れず、やがて両親も諦めたらしい。以来、剣一筋で育ち、物心ついたときには、もう神童としてニピサトの侍衆の中で剣を振るっていたという。都へ上ったのは若千十一歳のときだというから、その頃、裕福な貴人の娘として手鞠遊びなどをしていたミズキなどより、よほど早熟だったということらしい。それからもう八年になるとイズルハが少々の感慨を交えて語ったとき、リンが素っ頓狂な声を上げた。

「えっ、すると……イズルハ様のお年は？」

「ああ、今年で十九に」

まさか、とミズキとリンは絶句する。するとこの武人は、自分たちとたったひとつしか変わらないということになる。

「……何か？」

イズルハが不思議そうに尋ねる。

「いや、お年が私たちとひとつしか違わないなんて、なんだか凄いな、と……」

「そ、そうですそうです！ それに比べると、わ、私なんてエン・ハへ奉納する、剣の舞いひとつ満足にこなせず……」

リンとミズキは素直に賞賛を込めた驚きを示したつもりだったが、意外にもイズルハは、急に少し落ち込んだ顔になった。驚いて理由を尋ねると、彼女はやや苦笑しながら、こう答えた。

「いえ、私はどうも歳より落ち着いているというのか……常に目上に見られてしまつて……」

年寄りがさく見えるというか、なかなか同年代の娘友達ができない、などというではないか。リンとミズキは、思わず顔を見合わせてしまった。続いて、ついでに素敵な殿方に言い寄られたこともない、などと小さく溜息などをついているところを見ると、本人は密かに真剣に気にしているようでもあった。どうやらこの天才剣士にも、人並みの悩みがあるらしい。

その刹那。くすり、とリンの口から笑みが漏れる。同時に、ミズキの唇からも最初、驚いたように目を見開いたイズルハだが、すぐに二人の心中を悟ったのだろう、やがて、当のイズルハまでも笑い声を立てはじめた。涼やかな三人の少女の笑い声。澄み切ったその音色の唱和は、青い空にこだまし、春の日差しが注ぐ竹林の中に響き渡った。

それからまもなく、イズルハ本人から早々に申し入れがあった。

「私のことは、イズルハと呼んでくれないかな？」

驚いたことに、すでに宮中のような丁寧な言葉遣いではなく、ざっくばらんである。素のイズルハは、生真面目なところはそのままながらさっぱりした気質の娘で、言葉づかいもそれにふさわしいものを好むようだった。

「私のお師匠様が、お茶の作法と言葉遣いにはうるさいお方ですね。また、貴人に会うときは最初が肝心だと強く言われていて、最初に“そういう雰囲気”で謁見してしまっただから……」

そう言いながら、小さく苦笑してみせる。

「青武皇様の手前、それ以来、グースラの皇護の刃、イズルハ」の役回りを務めてはいるけれど、正直……ちよつぱり自分でも堅苦しいかな、と」

(じゃあ、私たちが感じていたイズルハ様の印象って……)

今までの流れで、わりと仕方なしに演じられていたものだった、ということになる。

「とはいえ、品格を飾ることにだって、意味はある。私だっていざとなれば、宮中の女房方が使われる、上品な言葉だって使えます。ものね」

わざとらしく語尾を飾ってみせて、イズルハは白い歯を見せた。

「ただ、やはり根は田舎者なものだから……すまない、なんとなく二人の雰囲気、親しみやすかったというか。これは私にとつても良い機会だと感じたんだ」

「は、はあ……」

自分たちが根っからの都人(みやこびと)ではないことが、奏功したということになる。リンとミズキには、あまりにも意外すぎる事実であった。

実は彼女は、最近宮中の護衛任務ばかりしており、己の剣の腕がなまるのを心

配していたのだという。してみると、この任務に介添えとして付いていくと言い出したのは、そういう算段もあつてのものだったのだ。呆然とするミズキだったが、リンはいち早く衝撃から立ち直つたらしく、しゃあしゃあと言つた。

「でもイズルハ様は、今のほうがいいですよ。こう言うとなんですけれど、確かにこの前までの雰囲気はちよつと親しみにくいというか……」

ちらりと舌など出して、あるいは無礼ではないかと思えるようなことまで言い切つてしまう。親友のそんな様子が、ミズキには返す返すも羨ましい。

「やれやれ、だから“様”はいらないと」

「いいえ、それはそれ、やっぱりけじめは必要ですもの。どう見てもイズルハ様は私たちより目上も目上、尊敬すべき“皇護の刃”様なのですから」

馴れ馴れしいかと思えば妙なところでお堅いのは、リンなりの配慮なのだろう。無然とした表情だつたイズルハも、小さく肩をすくめてみせた。どうやらあきらめたらしい。

その様子に、もともと彼女を凶々しく敬称抜きで呼ぶことなどできそうもなか

ったミズキは、ちよっぴり胸をなでおろした。

(それにしても人って、見かけでは分からないものだ……)

ミズキは新鮮な発見をした気分である。

それから、数刻が過ぎた。

「あれ」

丘を越え野原を横切りながらゆるかに続く街道の途中で、ふと、ミズキは足を止める。

「何？ どうしたの？」

さきほどの一件以来イズルハともすつかり打ち解け、にぎやかにイズルハと会話しながら歩いてきたリンが、同様に足を止めて声をかけてくる。

「あそこ……」

ミズキはそつと指で指し示す。とある街道脇に小道があり、その入口に石灯籠と鳥居が立っていたのだ。

その意匠からすると、土地神かイースラの信仰の中心である精霊神エン・ハを祀っているらしい。

「そういえば、ここ数日は特にエン・ハに祈りを捧げていなかったな」
合点したらしく、イズルハが呟く。

「せっかくだから、ここで先々の武運を祈っていきませんか？」

「まあ、そこまで急ぐ旅というわけでもないしね。そうしよう」

小道の中に入っていくと、わずかばかりの石段がある。それを登りきった途端、境内には意外な景色が広がっていた。

「わあ」

リンが驚いたように目を細める。境内には桜が無数に植わっており、ところどころに配置された真っ白い石灯笼などとあいまって、全体が桜色に染まった宮殿とでも言ったような風情である。

奥まった社の本殿らしき建物に通じる道などは、まるで桜並木の中にできた抜け穴のようになっていた。また、本殿の周囲はさらに背の高いクスノキの森だ。

天を覆うばかりの木々のせい、少し薄暗くなっているそこには、昼だというのに火がともされた石灯籠の灯りが、なんとも幻想的な雰囲気醸し出していた。

「こんなところがあつたなんて。さぞかし有名なお社なのでしょうね」

ミズキが感嘆の声を漏らす。

「私も知らなかったな。しかしどうも、妙な感じがするが……？」

イズルハは目を細めて周囲を見渡すが、とりあえずのところ、差し迫った危険はなさそうである。やがて三人はその細道を歩き、まもなく社の本殿に到着した。

本殿の建物は思ったより質素な作りだったが、手入れは行き届いているらしい。汚れた部分などはなく、清楚な雰囲気である。ミズキたちは、交互に巨大な綱で吊るされた銅鐸を振る。続いて三人が揃って本殿の前に並び、深々と二度お辞儀をしたあと、パンパン、とこれも二回手のひらを打ち鳴らす。その後再び、目を閉じてそつと頭を垂れた。二礼二拍一礼、というのがエン・ハへ詣でるときの決まりである。ミズキがついでに薄目を開けてちらりと見ると、イズルハの背筋はぴんと伸び、あくまで凜とした所作が崩れない。

(つくづく、できたお人だなあ)

ミズキは感心しつつ、エン・ハに祈る。

(私も願わくば、もつと強く……そして、この人のようにしつかり芯のある武人になりたい)

その直後である。

「あなたたち」

急に、後ろで声がした。ミズキが慌てて振り向くと、いつ現れたのか女がひとり、そこに立っている。この神社の巫女だろうか、長い髪を見事に結び上げていて、エン・ハを象徴する青い水衣に、差し色で赤が入った神職の衣装を着ている。瞳は澄んでいて深く、海原のようにどこまでも青い。ただ、その瞳の焦点はどこにか合っておらず、まるでこの世界とは別の場所を見つめているようにも感じる。まるで水の魔魂石ミスラムでできた人形の瞳のようだとミズキは思った。

「ずいぶんとものものしい出で立ちですね。……さては、ユキノ村に行くのかしら？」

微笑みながら、女は言う。なぜ、そんなことを知っているのだろうか。ミズキとリンより先に、イズルハがいぶかしみながら問う。

「……確かにそうですが。あなたは？」

「ふふふ。付近の村人たちが噂しておりましたゆえ。その黒髪に結った花に背格好、あなたはイスラの武人の中でも音に聞こえたイズルハ様でしょう？」

次いで彼女は一言だけ、付け加えた。

「お気をつけなさい……あれは、ありふれたそこの水妖ではありませんから」
につこり微笑んでから、きびすを返す。まるで水面を渡る白鳥のような足運びだ。

「あの、もし」

ミズキの呼びかけに、彼女は振り返りもしない。なおも呼びかけようとしたそのとき。ふと、一陣の風が巻き起こった。それは境内の桜の花びらを一齐に舞い上げ、ミズキは思わず片手を上げて目を覆う。次の瞬間、気づくとその不思議な女の姿はかき消えていた。

あとには桜吹雪の中、呆気にとられた顔のミズキたちが立ち尽くしているばかりである。

「いったい……何者だったのでしょうか？」

「分からないな。気配からして、ただの人ではなかったようだが」

「どちらにしても悪い存在じゃなかったみたいで、幸いだったわ」

「そうね、本当に良かった……！」

リンとミズキがお互いに言い募る。そのときである。

「これはこれは」

今度は、恐れ入ったような年配の男の声だ。一行が振り向くと、宮司らしき衣装を着た男が立っている。

「その格好、もしやイズルハ様の御一行では？」

まるでさきほどのやりとりを見ていたかのような展開に、三人は顔を見合わせる。話を聞いてみると、男はどうやらこの神社の本物の宮司らしかった。さきほどの不思議な女同様、青武皇が遣わした水妖退治の一行のことは、噂話で聞いて

いたらしい。

「宮司殿。少しお尋ねするが」

「はい、何でございましょう？」

イズルハはさきほどの女神官のことを尋ねたが、果たして宮司は首をかしげるばかりである。彼が言うには、この神社はそこそ由緒のあるものではあるらしいが、自分と娘、妻以外に、神職の者などいないというのである。念のために聞いてみたが、雇われ巫女や地元出身の奉公者などにも、思い当たる者はないという。

（あの者……いったい魔か人か……）

そのとき、リンがはつとしたように言った。

「もしかすると……エン・ハの化身か、その使いでは？」

「そう言えば、聞いたことがあるような……」

ミズキは小さい頃に聞いた昔話を思い起こしながら、そう言った。悪事を働く水妖を退治せんとするイースラの勇士に、水の精霊神たるエン・ハが人の姿を取

つてそれとなく助言や援助を行なった、というような古い言い伝えだ。

「私たちに、加護を与えてくださるということかも……きつとそうだよ！」

リンが興奮した様子で言う。なるほど、とミズキの顔もぱつと明るくなる。イズルハはともかく、ミズキは正直、自分とリンの退魔の技の腕前に多少なりとも不安を感じていたのだ。ミズキは一行の進む道に、さつと明るい陽光が差し入ったような気がした。

「……」

だが明るい表情の二人とは別に、イズルハは押し黙っている。

（あの気配……純粹な神性を持つ者とは、少し異なっていたような……）

考え込んでいたイズルハの耳はふと、リンがため息がちに漏らした、ある言葉を捉えた。

「それにしても……落ち着いた、美しい黒髪の方だったわね。私もあと数年経ったら、ああいう女性になりたいなあ」

ミズキも大きくうなづいている。だが。

(黒髪……?)

イズルハは、再び違和感を覚えた。胸に抱いていたかすかな疑念が、大きく広がっていく。

(私には……あの者は、白銀色の髪であるように見えたが……)

青き覇力を秘める彼女の瞳。その目には、通常の者には見えない物事の真理や人の魂の本質がぼんやりと映ることがある。それは戦いのおきにその太刀筋や武器の護りを強化するだけでなく、物事の先行きや本性を見抜く直感にも、少なからず影響を与えるのだ。

(ふうむ……)

イズルハはじつとあの女が消えた先を、身じろぎもせずに見つめていた。

※※※

彼女たちがユキノ村に着いたのは、翌日の夕刻だった。一行は村長をはじめ、

村の漁民たちに文字通りひれ伏すようにして迎えられた。ミズキたちはまず村長の家の客間に迎えられ、もてなしを受けることになった。さほど豪華ではないが、小村なりに贅を尽くした膳と魚の料理が出され、村に先祖代々伝わる舞いなどが披露されたあと、いよいよ怪物退治の算段が始まった。

「あの化物は決まって、潮が満ちる満月の夜に現れるのです……」

村長が苦り切った口調で言った。一行の中では一番武芸に長けたイズルハが自然と中心になり、ミズキとリンは神妙な顔立ちで聞き入っている。

「ふうむ。そうすると、次の満月の夜は？」

「さよう、あと三日後くらいかと……」

「なるほど。次はその化物の様子を詳しく聞かせてはいただけませんか？ 何でも魔物使いに操られているらしい、とも聞いたが……？」

村長が語る怪物の話は、都に伝えられてきたものとさほど変わりはないが、ただひとつ、その魔物使いらしき人物の容姿について聞くことができた。その人物は黒衣をまとい、頭に二本の小さな角、白い牙を生やした姿をしているという。

さらに、燃えるように赤い瞳を持っているらしい。

ミスキとリンはただただうなずきながら聞いていたが、話が続いて、その魔物使いの髪の色のことになったとき、イズルハの眉がぴくりと動いた。

「村長殿……その話は確かですか？ その魔物使いは、白銀色の髪をしていると？」

「は、はい。村の者からそう聞いております。雷光の中、黒い頭巾の内から、銀の糸をより合わせたような髪がたなびくのを確かに見た、と……」

イズルハの剣幕に圧されたかのように、村長が縮こまって答える。

「ふむ……」

イズルハは小さな顎に指をかけて、少し考え込む。

「イズルハ様……何か？」

「いや、何でもない」

彼女に余計な心配をかけまいとするかのように、イズルハは、小さく首を振った。

※※※

「では、ごゆるりと。湯船の支度はしておきましたゆえ」

案内の下女が立ち去ると、周囲はミズキたちだけになった。もうあたりは夜になっており、下女が整えておいてくれたらしい松明の明かりと、銀色の月明かりだけが、周囲を照らしている。真っ白い湯気が磨かれた石の床をおおう中、絹糸の薄布を体に巻いたミズキは、同様の姿のリンとイズルハに向けて言った。

「何だか……塩っぱい匂いがしませんか？」

そういえば、とリンが続く

「どこことなく、磯の香りがするとうか」

「ふむ。ここは海にほど近い場所だからな。潮風に加減だろう……」

イズルハが小首を傾げながらそう言うと、ミズキとリンもなんとなく納得した表情になる。

ここは、ユキノ村にほど近い場所にある、天然の温泉である。本来は村の公共浴場的な意味があり、脱衣小屋や石組みの床まで整えられている。

怪物退治の打ち合わせが一段落すると、旅の疲れをいたわろうとする村長の勧めで、ここを訪れることになったのだ。せいぜい数日の短い旅ではあったものの、その間、川での水浴びや旅籠での粗末な風呂くらいにしか浸かれなかったので、正直ありがたい配慮でもあった。ちなみに着物の番は、さきほどの下女が行ってくれることになっていた。

やがて周囲をおおう湯気の中、ミズキたちは絹糸の薄布を巻いた身体を、思い思いに湯船に沈める。

「……？」

三人そろって、妙な表情になった。次の瞬間、リングがさつと湯溜まりに人差し指を突っ込み、ちろりと桜色の舌で舐める。

「ちよつぴり、塩辛い……？」

「なるほど、海水が混ざっているようだな。そういえば、思い出した。世の中に

は熱せられた海水が湧き出す塩湯というものがあるらしいが……これがそうなのか」

ひとり合点するイズルハ。空には少し雲がかかった月が浮いていた。

人肌より少し熱い程度の湯が、実に心地よい。湯船の中で、ミズキはふうっと大きく息を吐いた。湯気ではつきり見えないが、イズルハもリンも、思い思いに湯に浸かり、旅の疲れを癒しているようだった。

ふと。白く煙る湯気の中、不意に水音がした。見ると人影がそっと、ミズキのそばに近寄ってくる。

「ミズキ……」

「何？」

それは、顔を上気させたリンだった。彼女は白い手を動かして、そばに浮いている板切れのようなものを、すいっとこちらに押しやった。見ると、白いとつくりが乗ったお盆である。

「お酒……？」

「ミズキは気づかなかったが、どうやらさきほどの下女が気を利かせておいてくれたらしい。」

「さあ、ミズキも一杯やりなよ」

「え、でも……イズルハ様は？」

あちらを見ると月明かりの下、細い指に持った杯を傾けているらしいイズルハの姿が、ぼんやりと見えた。急に、リンがミズキの首にがばりと手を回してきた。

「うーい、酔っ払った〜!!」

「ちよ、ちよっとリン……」

ぐいぐいと身体を押し付けてくるので、ミズキは少々困って、腕でリンの身体をあちらへ押しやるうとする。

「よいではないか、よいではないか。減るもんじゃなし」

完全に酔っているようだ。今まであまり酒を嗜んだことのないミズキは知らなかったが、リンは酒屋の娘のわりにけっこう酒癖が悪いらしい。

「もう……」

苦笑していると、不意にリンの声が、真剣な響きを帯びた。

「あのねえ、ミズキ」

「ん？」

顔を近づけてきた彼女の改まった表情に気づき、ミズキはふと奇妙な予感とともに緊張を覚えた。リンはいつものように、彼女の瞳をまっすぐに覗き込んでくる。

「実はさ……私、あなたに言わなきゃいけないことがあるんだ」

「……？」

「その……さ……」

リンはしばらく逡巡していたが、やがて酔いに任せて、といった様子で一気に打ち明ける。

「私ね、この旅が終わったら……国に戻るかもしれない」

「えっ」

ミズキは呆然として、しばらく言葉が紡げなかった。

(リンが？ 国……故郷に戻る？)

一瞬、意味がわからなかった。修業中の武者巫女と氷結術士だから、二人の将来と先行きは自然と異なる。だからこそいずれば、とぼんやりと考えたことはあったものの……この旅が終わったら？

今、リンははつきりとそう言ったように聞こえた。

「どうも最近、親父の身体の調子が悪いみたいでさ……実はひと月ほど前に、手紙がきたんだ」

リンは湯の水面にそつと目を落としながら、静かに呟いた。

「もし氷結術士として、イースラの王宮護衛隊か水軍への仕官がかなわないようなら、婿を取って家業を継げってさ」

「……そ、そんな」

あまりにも急すぎて、どう受け取ったらいのか……ぐるぐると混乱する頭の中で、ミスキははつとした。なぜ彼女がこの討伐の旅に付いてくると言い出したのか。自分は呑気にも、リンとはこれまでのような関係がずっと続くものだと思

っていた。だが、彼女にとつてはそうではなかったのかもしれない……。

トウア学院の学生たちは、学び舎を出て行くとき、仲間同士で小さな旅行に行く習わしがあるのだという。リンにとつては、この旅がそういうものであったのかもしれない。

「期限は次の登用試験まで、だつてさ。ごめんね、いつ切り出したものかずつと迷つてて……。ほら、あまり湿っぽい感じにはしたくなかったから」

そう言つて、リンは沈んだ雰囲気振り払おうとするかのように、ちよつぴりぎこちない顔でにつこりと笑つた。

「で、でも、それはリンが次の試験に合格すればいいだけのことだ」

「そうだね。でも……あまり、自信はないかな。実はね、私、ちよつと術士になるには資質が足りないかなつて思つてたんだ、ずつと」

黒いビロードを広げたような夜空と、銀の皿のように浮かぶ月を見上げながら、リンは珍しく弱音を吐いた。

「この旅の間、イズルハ様と接してて、はつきりと分かつた。分かつちやつた

……人には、天稟の差っていうものがあるんだね。イズルハ様の覇力……私みたいな未熟者にもはつきり感じ取れるもの。一流になる人っていうのは、ああいうものなんだなって……とてもじゃないけど、かなわないや」

「リン……」

ミズキには、掛ける言葉がない。ああ、自分はどうしていつもこうなんだろうか。ミズキが唇を噛んだそのとき。

「……それは、違うな」

静かな声。立ち上る湯けむりの中から、湯面にさざ波を立てながら、すっと細身の影が立ち上がる。

「イズルハ様……？」

いつの間に、近づいていたのだろうか。ミズキには気配すら感じられなかった。リンも同様らしく、少し驚いたような表情だ。

「リン」

イズルハが静かに呼びかける。

「は、はい」

「ひとつ聞くんが、お前は覇力について、どう考えている？ 私が生まれたときから、覇力をこの身に宿していたと思うのか？」

「え……？」

ミズキも目を丸くする。イズルハに天稟があるのは、誰の目にも明らかだ。だからこそ、ミズキもリンも彼女が生まれつき青き覇力を備えていたのだと思っていた。

「そうではないんだ。私の覇力は修行を重ねたある日、すんと何かが腑に落ちて、その結果として身に付いたものなんだよ。実はね、私も……リンとまったく同じことを、ある人に対して口にしたことがあるんだ」

イズルハは苦笑しながら言う。

「その相手というのは、私のお師匠様だ」

そう語るイズルハは、少し懐かしそうだった。彼女の師匠とは、地元で侍衆の中に混じって剣の修行をしていたとき、出会ったのだという。まだ幼いとはいえ、

それまで大人を相手にしても負けなしかったイズルハが、苦もなくあしらわれたらしい。

「師匠も青き覇力を持つ剣士だったんだ。どれだけ頑張っても、血の滲むような修行をしても足元にも及ばない……まだ未熟者だった私は、それが悔しくてね。つい弱音半分の憎まれ口を叩いてしまった……そうしたら、師匠に丸一日も正座させられた上で、たつぷりとお説教をされたよ」

あれはキツかったな、と苦笑いするイズルハの言葉を、リンとミズキは神妙な面持ちで聞いている。イズルハは真剣な表情に戻ると、続けた。

「私が覇力を宿すことができたのは、たゆまぬ修行と連続した大きな意志の力なんだ。私たちはみな、魂を持つ存在だ。己を、世界を変えていこうとする精神の働き……それを絶やさない限り、私たちは必ず前に進むことができる……」

そこで、しばらくイズルハは言葉を切る。やや間を置いて、にっこりと笑った。

「それにね、リン」

「は、はい？」

「お前は覇力のことを気にしているようだが、実は、覇力というのは、修行なしでも身に付けることができるかもしれないんだ。ここについては、トウア学院の学者たちが研究を続けている……。すでに水の魔魂石ミスラムの力を借りて、後天的に覇力を付与する装置までが生み出されているという話だ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。覇力が選ばれた者だけの資質だった時代は、もうすぐ終わるかもしれない。世の中は動いているよ……。私たちが思うよりずっと大きく」

イズルハはそう呟くと、そばに浮いていた自分の盆をついと引き寄せると、その上から青瑠璃色の杯を手にとった。こくりと白い喉を鳴らしながら、ほうつと息を漏らすと、そのまま夜空に浮かぶ月を眺める。ミズキは、そんなイズルハの様子をじつと見つめている。そんな様子に気づいたか、ふと、イズルハは唐突に言った。

「ふむ……。ミズキ。ちょっと聞くが、お前は覇力の本質についてどう思う？」

「え？」

唐突に問われて、ミズキは目をぱちくりさせることしかできない。

「覇力そのものじゃない……覇力の源のことだ」

えつと……と考え込むばかりのミズキに向けて軽く微笑むと、イズルハはその隣へと言葉をかける。

「じゃあ、リンは？」

ミズキに代わって水を向けられたリンは、少し考えてから答えた。

「エン・ハやヴェス、精霊神たちによって我らに与えられた恩寵……ではないのですか？」

「そうだね。私たちはそう教えられているし、そう考えている。けれど、実際は違うのかもしれない。トウアの学者たちがそれに関わる装置を作り出したという噂が本当なら、ね」

ミズキは、はつとした。確かに学者たちが信仰ではなく、技術の力でそういった装置を作りあげたのだとしたら……。リンも同じことに思い当たったようだった。

「そう。覇力にはまだ未知の部分が多いんだ。例えば、知っているかな？大陸の遙か西方、ガイラントのドルイドたちは、覇力を異端のものとして忌み嫌っているのだそうだ。ガイラントの民は我々とは文化も気質も異なるが、自然とともに生きる大地の民だ……戦士が尊ばれる風土であるにも関わらず、そこで覇力を持つものが忌避されているというのは、ちよつと妙な話でもあるだろう？」

（私、覇力について、生まれ持った勇者の資質ぐらいにしか考えてこなかったけど……）

そこまで考えて、ミズキは再びはつとする。

（でも、これは……これは、もしかするとエン・ハの教えに疑問を差し挟むことになるのではないだろうか）

エン・ハの教えは、この覇力について、さきほどのリンの答え通り、神の恩寵であると説いているのだから。リンは急に、胸の動悸が激しくなってきたことに気づいた。そんな彼女の心中を知ってか知らずか、イズルハは続ける。

「もちろん、私は、エン・ハの教えとその力を信じている。けれど、ときどき分

からなくなることもあるんだ。精霊神たちが大きな力を持っているなら、なぜこの地から争いの種を、綺麗さっぱりまるごと消し去ってしまわないのだろうか？

また、なぜ大水害や天変地異、流行り病や戦乱で、罪もないものや魂に穢れないはずの子供たちが、おおぜい命を落とさなければいけないのか……？」

「そ、それは、エン・ハラ精霊神の力に反抗するものたちが、この世界にいるからでは？」

リンとミズキが、同時に言う。

「すべては我らに与えられた試練、というわけだろう。青の社の大巫女殿もよく説いておられるが……そういえば、ミズキとリンは『グロノグリフ』について聞いたことがあるかな？」

「はい、この世界のすべての出来事とあらゆるものの辿る運命が記されている、という」

「この大地とは異なる場所にある、ザインの神殿に安置されているのだとか」

「そうだ。この世界を作ったザインによって生み出されたという創世の書……そ

の形は誰も知らないが、巨大な石版やある種の魔力を秘めた巨大な装置ではないか、と予想するものもいるな。実は私はね、自分たちだけではなく、あるいは精霊神たちの力ですら、その書物によって縛られ、影響を受けているのではないかと思うことがあるんだ」

「そ、そんな……」

無限の力を持っていると信じていた精霊神たち。その力にも、もしかすると限りがあるというのだろうか。

「この世界の成り立ちや、森羅万象に隠された秘密……知れば知るほど、分からなくなる。あるいは私たちの魂ですら、永遠に広がる水面にゆらめいているだけの、曖昧なものであるかもしれない。別の世界から白幕の上に幻写灯で照らし出された、薄い影のような……」

なんだか、自分たちとは考えていることの枠組みが、そもそも大きく違う。リンもミズキも、呆気にとられて、珍しく饒舌に語るイズルハの横顔を眺めていた。ふとイズルハもその視線に気づいたようだった。苦笑すると、短く言う。

「すまない、忘れてくれ。無粋な世迷言だった」

続いて杯を取り上げ、彼女は再びこくり、と酒を口に含む。

「……生き返るようだな。良い月夜だ」

ほんのりと、頬に朱が差している。それが恥じらいによるものか、酔いによるものかは、ミズキたちには分からなかったが……ミズキは思う。この人の眼は、この人の瞳は、自分たちよりよほど遠いところを見ている。少し身震いする思いだった。

自分は本当に、未熟者だ。さっきだって意気消沈した親友を慰める言葉も言えず、彼女の助けになる方策ひとつも教えてやれなかった。

(ああ……私は本当に、まだまだだな)

恥ずかしくて消え入ってしまったような気持ちである。湯気の中に身体を沈め、ミズキもまた、せめてイズルハを真似るように、じつと夜空に浮かぶ月を見上げてみた。

その形は、ほぼ真円に近づいている。あと数日で、潮が満ちるだろう。

※※※

いよいよ、満月の夜が明日に迫った。この村にただ一人住んでいる空見の司によると、明日はどうやら嵐になるらしかった。塩湯から戻ったミズキたちは、ユキノ村の村長の前で、彼の話を聞いていた。

「あの化物は、満ち潮の日だけではない……嵐の夜をことのほか好みます。その条件が二つ重なる明日こそはきつと、浜に現れるでしょう。何卒、宜しくお願い申し上げます」

彼はそう言つて、白髪まじりの頭を深々と下げる。

「わかりました」

「力を尽くします……！」

「お任せくださいね！」

イズルハにミズキ、リンは口々に答え、化物の出現に備えた。やがて、その日

の夜半。明日の戦いの手順について話し合っているうち、風雨が激しくなってきたのが、家の内からでも分かるようになってきた。

「相当に、強い嵐のようだな……」

イズルハが呟く。比較的大きな村長の家の中ですら、時折風の音が響き渡るほどだ。

「私、ちよつと外の様子を……」

ミズキが立ち上がった瞬間である。突然、村長の家の表戸ががらりと開いた。

「……で、出やがった!」

全身で息をついているのは、村の漁民の若者である。

「なんだと?」

村長が驚いた表情を見せる。若者が息も切れ切れに語った話によると、さきほど漁船の様子を見に浜に出たとき、化物に遭遇したらしい。

「も、もう……? 明日だとばかり思っていたのに……!」

「予想より早いな……!」

広間に緊張が走り、全員の唇が引き結ばれる。

「潮の微妙な満ち引きの加減が、化物の動きにわずかな影響を与えたのかもしれない……とにかく、お願いいたします！ どうか、どうか！」

村長が頭を床にこすりつけんばかりにして、嘆願する。それに向けてこくりとうなづくとき、イズルハたちは蓑と笠を携え、一斉に立ち上がった。

表に走りでると、空は荒れに荒れていた。防水用に油引きし、水蛭の薄皮をかぶせた明かりを頼りに、闇の中を浜に向かって走る。海が轟き、塩辛い飛沫が大風によって吹き上げられ、顔にかかる。前日に見回って調べておいた、浜を見下ろす岩だらけの丘の上に立ったとき、イズルハたちは、暗い浜に蠢く、その巨大な姿を目の当たりにした。それはやすやすと漁師の網小屋を破壊し、鉄で船を持ち上げている。次の瞬間、船そのものがぐつと弓のようにたわむと、一瞬、間をおいてから砕け散り、木片がばらばらと宙に舞った。まさに、恐るべき力である。

「死招きガニ……」

イズルハが小さく呟く。

ミズキは身体がわずかに震えるのを感じた。それは、蓑の上からも染み込む雨のせいだけではない。海の藻屑となった者たちの亡霊が生み出したとも言われる死招きガニ……それは数ある海の魔物の中でも、ひとときわ恐ろしい存在だ。生半可な鉈や槍などは通さない硬い殻を持ち、その食欲は身体同様、とてつもなく大きい。さらに厄介なのが、呪われた魔力を秘めた鋏だった。その鋏は捕らえた獲物を決して逃がさず、浜を襲ったときには建物や船を片っ端から破壊してしまう。それに襲われた地域を、まさに魔物と呼ぶにふさわしい力で蹂躪し、荒廃させてしまうのだ。

「行くぞ！」

少しだけ怯んだミズキたちの様子を見てとったのか、鼓舞するようにイズルハが叫び、駆け出す。慌ててミズキも、その飾られた鞘から刀を引き抜き、後に続いた。

リンが、後方からまじないの言葉とともに、小さな呪符を数枚引き出して、空

に放つ。同時に、一帯がほんのり明るくなった。氷結術ではなく、街のまじない屋などで扱っている、明り取りの符による術である。しばらくの間は、松明のように周囲を照らしてくれるだろう。そのぼんやりとした光の中……小山のように盛り上がった青暗い殻と丸太のような手足が、蠢いている。

大蟹は、カチカチと音を立てる不気味な鋏を振り上げ、ミズキたちを脅すかのよう伸び上がった。その巨体目がけて矢のように駆け寄っていくイズルハ……そんな彼女に向け、意外な素早さで、ちよつとした城門の扉ほどもある鋏が振り下ろされた。

「あっ……!!」

思わず声を上げてしまったミズキだったが、イズルハはすでに、ひらりとその攻撃を避けている。続いて、イズルハは踏み石を飛び渡るようにして節足から甲羅へと飛び移っていく。

(凄い……)

その素早い動きに、ミズキは感嘆の声を漏らしてしまふ。次の瞬間、イズルハの裂帛の気合とともに、銀色の光が煌めいた。

彼女が、死招きガニの柄付きの眼と眼の真ん中に、刀を振り下ろしたのだ。ガキリ、とまるで岩を叩いたような音が響き渡った。

「むう……」

イズルハが少し眉をひそめ、怪物の甲羅を蹴りつける。その反動を利用し、そのまま飛び退ると、水を吸った黒い砂浜の上にすとんと降り立った。まさに流れるような、美しく鮮やかな動きである。

（わ、私も……！）

叩きつけるようだった豪雨が少し弱まったのを幸いに、ミズキもまた、大蟹に向けて駆け寄っていく。とはいえ、覇力を駆使したイズルハのような芸当はできない。

「やああああ!!」

ミズキは駆けつつ刀を構え直し、死招きガニに迫った。間髪入れず、気合とと

もにそれを振り下ろす。その巨大な節足の根元、関節にあたる部分を狙って刃を叩きつけた。まるで、岩を叩いたような手応え。

(!?)

ミズキに向けて、イズルハが叫ぶ。

「気をつける！ とてもじゃないが、一度の斬撃で切り倒せる身体の硬さじゃない……！」

なるほど、確かに普通の刀なら、簡単に刃こぼれしてしまいそうではある。

(でも、この刀なら……！)

ミズキの刀は、都に上るときに父親が持たせてくれた一族の宝刀である。水の魔力を有し、多少のことでは刃こぼれなどしない。それを利して、ミズキは化物蟹の同じ箇所を狙って、二度、三度と刃で切りつけていく。大蟹は鋏を振り回してミズキを追い払おうとしたが、すかさずリンが放った氷結術の魔弾とイズルハの巧みな援護で、それがままならない。暴れる脚をかくぐり、鋏の一撃を避けつつ十数度目に刀を振り下ろしたとき、妙な感触があった。怒りに駆られてか、

その大蟹が小さく泡を吹き出すのを、ミズキはちらりと横目で見た。あとには、のたうち回る巨大な脚が一本。執拗に脚の付け根の関節部を狙った斬撃で、ミズキは見事に、丸太のようなそれを切り離すことに成功したのだ。

（やったー！）

ミズキはほっとリンとイズルハのほうを振り返る。

「避ける！」

「ミズキツ!!」

イズルハとリンの声が同時だった。ミズキがはっとした瞬間——イズルハの刃やリンの氷結術を半ば無理やり甲羅のひときわ硬い部分で受け止め、大蟹が強引に動いた。巨大な右手の鋏が、一直線にミズキを狙って突き出されてくる。

「あっ……！」

ミズキは大きく身をよじった。あわやというところで腕や身体自体を挟み込まれることは回避したものの、着物の裾が掴まれてしまったようだった。ぐん、と信じられないほどの力で、空中につまみ上げられてしまう。

「放せ！ この！」

自由になる左腕に刀を持ち替え、無理矢理に叩きつけたものの空中では力が入らず、大蟹はびくりともしない。やがて、同じく巨大な左の鋏がミズキを引き裂こうと動き出す。

(ツ!!)

ミズキが思わず目を閉じた瞬間——急に身体が解放され、宙に舞った。

「イズルハ様！」

地上に落ちて顔を上げたミズキと、術の構えを取ったままのリンが同時に叫ぶ。宙に跳んだイズルハが、鋏に挟まれていたミズキの裾を切り離したのだ。だが、そのせいで彼女は、ミズキを狙った大蟹の左の鋏の前に身体を晒すことになってしまった。

ガチリ、と雨の中に奇妙な音が響く。それは、力任せにイズルハを捕らえた、大蟹の鋏の関節が鳴る音だった……。

「う……」

いつのまにか、イズルハの身体が薄く青い光を帯びている。覇力で対抗しているのだが、大蟹の鉄は巨大な万力にも等しい。

イズルハの整った顔が苦痛にゆがむ。それを見ているミズキの表情が、たちまち紙のように白くなった。

「イズルハ様！ イズルハ様！ イズルハ様アアツ!!」

半狂乱になつて、ミズキは叫び続ける。自分のせい、自分のせいで……頭は真っ白になり、もう何も考えられない。知らず知らずのうち、涙が溢れていた。

「ミズキ！」

リンの鋭い声が飛び、ミズキははつとする。

「泣くな……だめだよ！」

短い言葉。けれど、ミズキには分かった。今、ここで。一度でも、たった一度でも涙を見せてしまったら……そのまま堰を切ったように、心の内から流れ出てしまうものがある。心に溜めた勇気や戦う意志。リンはそれを保ち続けると言っているのだ。止まない雨の中で、親友のそんな激励の意図が、ミズキにははつき

りと伝わってきた。そう悟るやミズキの頭の中にあの日の光景が蘇る。呆れ顔のシイナが、腰に両手を当ててこちらを見下ろしている。

「また泣いているの？ まったくあなたは……泣けばなんでも済むと思っているのかしら？」

惨めな自分。弱い自分。いつそのまま消えてしまいたいほどの、哀しく重い無力感の檻に囚われて過ごした幾つもの夜。

嫌だった。あの檻に囚われた自分に戻るのは、絶対に嫌だった。

そうだ、と強く思う。

今……今だ。今、ここで戦わなければ。今、ここで立ち向かわなければ……ずっとずっと私は、このままだ。

(強くなりたい。私は、強くなりたいんだ……！)

そのためには、今ここで。今、ここで勇気を示してみせる！

(……もう一度！)

心を定めてしまえば、自然に手足に力が湧いてきた。

（リン、ありがとう！ 私、やってみるよ……お願いね！）

もう大丈夫、という意味と次の動きを伝える意味を込めて、ちらりと目配せする。リンが真剣な顔でうなづき返してくる。それだけで、意志は通じた。ミズキは手に力を込め、宝刀を構え直す。リンも同時に、手で印を結び、神詞（のりと）とともに術式を編み始めた。

「やーっ！！」

彼女の手の中で白と青の光が生まれ始めるのを見ながら、ミズキは思い切り気合の声を入れ、砂浜を走り出す。巨大な死招きガニとの間合いを詰め、大きく跳ぶ。空中で刀を振りかぶったのと、後方からリンの氷結術の術光が飛来するのが同時だった。狙いは青白く凍りついた、大蟹の鋏の付け根だ。

（お願い……！ イズルハ様をお助けください！）

ミズキはエン・ハに祈りつつ、渾身の力を込めた一撃を振り下ろす。ガキリ、と大蟹の関節が鳴った。まるで巨大な氷の塊を叩いたような感触……斬撃の反動を殺しながら砂浜に転がったミズキは、体術の受身の要領で素早く起き上がって

から、相手の様子を確認する。ミズキには表情を持たないその大蟹が、一瞬苦痛に顔を歪めているように見えた。硬い甲羅に直接覆われていない関節部を狙ったのは、やはり有効だったようだ。さすがに鉄を切り落とすことはできなかつたが、代わりにその力が緩んだらしい。鉄の動きが、わずかに鈍っている。次の瞬間、鉄から脱出したイズルハの身体が、ふわりと宙に投げ出された。どさりと音を立て、そのまま砂浜に横たわったところに、ミズキとリンが駆け寄る。

「イズルハ様！」

「しっかり！」

幸いイズルハはすぐに顔を起こすと叫んだ。

「まだだ！ 鉄にもう一撃を！ 私のことは構わず、早く！」

「はいっ!!」

彼女の身体を再び覆いつつある覇力の青い光と、その気丈さに安堵したのも束の間、リンとミズキは再び、化物蟹に向かい合った。目と目で合図を送り合う。

(勝てるかもしれない……)

さつきは破れかぶれと言われても仕方がない一撃だったが、今回は違う。ミズキの胸に、かすかに希望の明かりが灯った。さきほどの氷結術と斬撃の合わせ技は、確かな一撃を与えたのだ。それに、手傷を負っているとはいえ、イズルハも持ち前の覇力で回復しつつある……。

大蟹は怒り狂っているらしく、頭上でせわしなく鋏を振り回し、噛み合わせて何度も大きな音を立てている。やがて、ミズキとリンが体勢を整えたのに気づいたのか、素早く脚を動かし、こちらに向き直った。ミズキはそっと、乾ききっていた唇を舐めた。自分でも驚いたことに、今は冷静に死招きガニを観察する余裕さえあった。

（そんなに暴れてちゃ……弱点の関節を守ることに、忘れちゃうんじゃないの……！？）

心の中で、挑発気味に呟いてみる。その声が届いたわけでもないだろうが、大蟹は、威嚇するかのように鋏を振り上げた。

その姿を見た瞬間、ミズキの脳裏を青白い閃きが走り抜けた。

(!?……なんだか、分かる。見えるような気がする。ここからこう切り込めば、きつとあいつはこう動いてくる……!)

心が氷のように冷たく、それでいて清流の流れのように澄み渡っている。不思議な気持ちだった。

(ミズキ……?)

リンはその側で、急に人が変わったようにすら見える、親友の表情をそつとうかがっていた。その視線は死招き蟹をまつすぐに捉え、身体には気力がみなぎっているようだ。

(あれは……?)

リンははつとした。ミズキの身体に、ほんのわずかだが、ほの青い光がまどわりついているように見えたのだ。少し後方から、傷ついた身体を癒しつつあるイズルハも、そんなミズキを驚いた面持ちで見つめていた。常人と異なる瞳を持つイズルハには、今やはつきりとミズキが身にまとう青い光が捉えられていた。

(覇力の伝播か……まさか、ここで目にするとは……!)

覇力は魂に宿る力だ。戦場では、ごく稀に他人の覇力の影響を受け、自らも覇力を身にまとうようになった者が現れるという。

(ミズキに、そんな資質が眠っていたとは……)

イズルハは改めて、青き覇力に覚醒しつつある武者巫女の少女を見つめる。

(あの帝との謁見の間で、かすかに私に訪れた予感と閃き……つまりは、こういうことだったのかも知れないな)

イスラには新たな勇者の育成が必要だ、と青武皇に告げた言葉。それはなんとなく胸に湧き上がったことを形にただだった。もちろん別に嘘や方便というわけではなかったが、期せずして今、イズルハの前にはその言葉通りの未来が出現しつつあるのだ。そんなイズルハの胸中を知ってか知らずか、ミズキは大蟹からじつと視線を外さない。やがて、その呼吸が静かになる。次の瞬間、羽毛が舞い落ちるかのように静かに、時は満ちた。

「行くよ!」

「うん!」

声をかけあつて、ミズキとリン、二人の少女が走り出す。剛力とともに力任せに振り下ろされた鋏が空を切り、砂浜の泥を叩く。次の瞬間、その鋏に冷気がまるとわりつき、大蟹が一瞬、動きを止めた。そしてひらり、とミズキの袴の裾が翻る。そして現れたのは、イズルハはもとより、リンも思わず息を飲んだほどの光景だった。ミズキはまるでそれが神社の境内の石踏みでもあるかのように、軽やかに大蟹の鋏を駆け上つたのだ。一気に鋏の付け根に迫り、跳躍する。

(なんと……！)

一瞬戦いの最中であることも忘れ、イズルハは感嘆の色を隠せずにいる。それはまるで一流の踊り手の舞いのような……イズルハ自身でも為せるかどうか分からないほどの、美しい動作と身体の流れだった。そして——ミズキの持つ宝刀が、青い霸力の軌跡を描いて宙を一閃する。続いて、大蟹の甲羅を勢いよく蹴ったミズキが、ふわりと浜に着地する。

次の瞬間、まるで巨大な岩の塊でも落下したかのような物音が響く。周囲に、雨と砂と塩水が混じった泥の飛沫が大量に跳ね上がる——大蟹の右の鋏が、もげ

落ちたのだ。

(やった！)

リンとミズキは、素早くうなづき合う。

大蟹自身も、鮮やかな連携と冷気に加え覇力をまとった斬撃の威力に、意表を突かれたようだった。脚を動かし、少し後ろに下がって距離を取ろうとする。大蟹が怒りに我を忘れ、守りがおろそかになるようならそのまま止めを刺したいところだったが、どうやらそうも行かないらしい。

次の一撃はさすがに警戒されて、ああは上手く決まらないだろう。ミズキとリンは油断せず大蟹を警戒しながら、じりじりと後ろに下がる。やがて二人はイズルハの倒れているところまで下がると、さっと二人で彼女を抱き起こす。

「大丈夫ですか、イズルハ様！」

「ああ……なんとか。それにしても、素晴らしい技だったな」

ミズキの頬がさつと赤くなった。

「いえ、自分でもなんだか分からなくて……まるで魂が洗われて、心の中に別の

時間が流れ込んできたように感じて……」

「それが、覇力の目覚めだよ。昨日までと、まるで違った景色が見えるようになる……おっと、おしゃべりは後のほうがよさそうだな」

「えっ……!?!」

「あちらは、まだ戦う気のようなだ。引くつもりはさらさらなさそうだぞ……」

右の鋏を失い、少し距離を取った化物蟹は、無表情に三人を見つめている。ふと、その口から泡が吹き出した。それは次から次へと、途切れなく吐き出され始める。

「あれは……!?!」

イズルハが怪訝そうに呟く。ミズキとリンも、意外な事態に目を丸くする。大蟹の吐き出す泡が、失われた鋏の根元に集まり出したのだ。同時に、青い光が泡の塊から発せられ始める。

「……まずいな」

ミズキとリンが見つめている横で、イズルハが小さくつぶやいた

「あれは、ミスラムが持つ魔力の光だ……、奴は、細かく砕かれたミスラムの破片を飲み込んでいたんだ」

ミスラムは、イースラ近辺の海底や昔海だった場所などから採れる青い魔魂石である。それは時間に干渉し、魂の覇力を磨き、高みへと導く力を持つという。

「そういうえば、聞いたことがある……北方の海に棲む大海蛇には、海底を漁り、その破片を無数に飲み込む習性を持つものがいるとか」

リンが呟く。彼らはその魔力により、彼らはときに空間を歪め、時の海を泳ぎ渡ることさえしてみせるのだという。

「でも、あの化物蟹は……一体何を？」

「分からない。が、とにかく嫌な予感がする……」

イズルハが眉をしかめて言った次の瞬間、大蟹の鋏を覆う泡がいつせいに光を発したかと思うと、虹色の輝きが周囲に満ちた。次の瞬間、ぼんやりと虹色の光源に覆われた空間が歪み、景色が蜃気楼のようにぼやけ始める。それは一瞬のうちに起きた。やがてその空間の歪みのもとにもどったかと思うと――。

「ああっ!？」

「そ、そんな!？」

「……ッ?」

信じられない光景に、ミズキとリンは目を見張り、イズルハもさすがに小さな声をあげた。なんと、大蟹の失われたはずの鍔が再生していたのだ。絶句するリンとミズキの横で、イズルハは素早く頭を働かせ、目の前で起きた現象の本質を悟ったようだった。

「時間だ。ミスラムの効果を魔法のように使って限定的に時を巻き戻し、鍔だけを“傷つく前の状態”に戻したんだ」

「えっ」

「そ、そんな……」

「おそらく本能とでもいうべきものが取らせた行動なのだろうが……まったく予想外だ、これは。たぶん、あれはただの死招きガニじゃない。かなりの時間を生きてきた、その長ともいえるべき存在だろう」

呻くように吐き出されたイズルハの言葉は、ミズキとリンを震撼させた。

「するとあの化物は、自分の身体を再生する力が……？」

「そういうことになるな。もつとも人間やそれに近い種族なら、ああはいかないだろうが……化物蟹の一族ゆえの、もとの再生能力もあつてのことだろうな」

（私たち、勝てるのだろうか……？）

ミズキの胸に、一気に不安が押し寄せてくる。なにしろ、さきほどの攻撃は、まさに会心、渾身の一撃だったのだから。そう何度も繰り返されるような技ではないのは、ほかならぬミズキ自身が何より知っている。イズルハの身体能力は回復しつつある。だが……相手にどれほどの深傷を負わせても、あそこまで綺麗に再生されてしまうようでは、数人がかりでも始末に負えないだろう。

「だが、やるしかないだろうな……」

そのとき、一際強くなった豪雨の中、三人の背後でかすかな物音がした。それは不吉そのものの音色のように、ミズキの耳に響いた。背筋に凍りつくような予感を感じ、そつと振り返る。そしてそのまま、彼女は絶句する。そこには、鋏を

振り上げ、立ちはだかる青い甲羅の姿があった。

二匹目の死招きガニ……一体、いつの間に忍び寄ったのか。イズルハが、己のうかつさに思わず、というように唇を噛んだ。

「仲間を呼んだ、のか……あれはただの身体再生の術というだけじゃない。あの虹色の光か何かが、身の危険を知らせる合図でもあったのか……」

イズルハが低く呟く。それからしばらく、誰もが無言だった。朝はまだ遠く、雨の中を色濃い闇が周囲を覆っていた。そんな彼女たちを嘲笑うかのように、巨大な青い甲羅が、がちがちと鉄を鳴らす。それは三人の未来に立ちはだかる、死の姿そのものだった。

※※※

——いつのまにか、嵐はすっかり弱まっていた。だが状況は、完全に劣勢だった。浜に転がっていた二つの岩の隙間に逃げ込み、大蟹たちの攻勢が集まる方向

を限定したものの、それはただの時間稼ぎでしかない。いくら切りつけても次には二体目が立ちふさがり、その間に手負いの方の大蟹は、少し下がって傷を再生してしまふ。それが、もう何度か繰り返されていた。

「リン、ミスキ……」

小さく、イズルハが言葉を紡いだ。

「次に『発』を使う。その隙に、奴らの脇をくぐり抜けて外に出ろ」

「！！」

『発』とは覇力を使って刀身を発光させる、一種の目くらましだ。イズルハはそれで敵に隙を作らせた上で、その間に逃げろと言っている。一瞬目を丸くした後、ミスキは、激しくかぶりを振った。

「嫌です！ イズルハ様を残していくなんて……絶対にできません！！」

「私は大丈夫、どうとでもなるさ。ユキノ村へ戻って、応援を呼んでくるんだ」

「嫌です！ それに相手は二匹もいるんです……いくらイズルハ様でも……！！

逃げるなら、一緒に！！」

「無理だな。お前たちにも分かるだろう？ “発”が奴らの眼に有効かどうかも正直分からないし、もう奴は油断をしていない。新手の二匹目も、だんだん私たちの動きに慣れてきたようだ。もう時間がない」

「……でも私たちだって、まだまだ戦えます！」

「ミズキ、お前の覇力の輝きはもうかすんできている……リンも、精霊力がもう限界だろう」

「そ、それは……」

ミズキはちらりと横のリンを見る。必死で印を崩さないように姿勢を保っているが、確かに親友の息遣いが荒い。

「剣術と違って、氷結術は多量の精霊力を必要とするゆえに、体力と気力の消耗が激しいんだ。それくらいのことだからぬ私ではないよ。いいから、行け」

イズルハは、岩の隙間から差し込まれてくる鉄の切っ先を、刀の峰で跳ね上げつつ言う。

「……でも……でも！」

激しく息をついているリンと、なんとか攻撃をしのいでいるイズルハの顔を交互に見比べながら、ミズキは泣き出しそうな顔になる。

「行け、ぐずぐずするな。一か八かなのはその通りだが……ここで迷えば、わずかな機会をも失うことになる。それに、ミズキ。武者巫女として大成したいのだろうか？ なら、迷うな。剣の道に迷いは不要だ」

ミズキはぎゅつと唇を噛む。小さな肩が、ぶるぶると震えた。爪が手のひらに食い込む痛みもものともせず、少女はこぶしを握り締める。そして……大きく息をつくど、小さく、しかしはつきりとした声で言った。

「絶対に助けを呼んできません。それまで、どうかご無事で……」

「ああ。頼りにしているぞ。リンも、無事にな……」

「はい……」

イズルハはそう二人に言葉をかけながらも、前を見据えたまま、視線を敵から逸らさない。髪を乱し、玉の汗を浮かべながらも、優美さを失わない白い横顔……そこに一瞬だけ、ちらりと笑みが浮かんだ。

(なんて美しいんだろう。このひとの横顔を、きつと私は生涯忘れないだろう……)

ミズキの心に、神聖な誓いにも似た感情が湧き上がる。そして彼女は想いを振り切り、リンとともに飛び出す体勢を作った。

「行くぞ……！ ハッ！」

イズルハの掛け声とともに、岩の隙間に青い光が満ち、一気に周囲を明るく照らした……。

※※※

無我夢中に、足を動かす。襲ってくる大剣を何とか回避し、砂浜を一気に駆け抜けようとしたミズキの足が、急にもつれた。

水を吸った黒い砂浜がせり上がり、ミズキは思わず手をついて、砂浜を転がった。どうやら埋まっていた流木に足を取られて、突っ伏してしまっただけらしい。

「だ、大丈夫だから……リンは、先に！」

そう言いながら慌てて起き上がった瞬間。がんと頭を殴られたような衝撃が走った。返事がない。リンが、いない。真っ青になって振り返った瞬間、ミズキの瞳に、絶望的な光景が映った。岩の隙間に陣取るイズルハと戦っているらしい大蟹の後ろ。そこに控えていた、もう一匹の死招き蟹……その片方の鋏が、まるで自分の手柄を誇るかのように、無造作に宙に突き出されている。そこには、動きの鈍っていたほうの「獲物」が、しっかりと挟み込まれていた。すぐに止めを刺すつもりはないのか軽く握っているだけらしいが、それでもその力は計り知れない。ミズキを氣遣ってか、強烈な握力に身体を圧迫されているというのに、リンは声を立てる様子がなかった。覇力による防衛で対抗できるイズルハはともかく、氷結術士であるリンには、その握力に対抗するすべはない。

ミズキの視線に気づくと、血の気の引いた顔が無理やりに微笑を作り、ぱくぱくと口が開いた。声こそ聞こえないが、ミズキにははつきりと分かる。

(逃げて……ミズキだけでも……)

「うわああああああああああ!!」

その途端、ミズキの口から言い知れない感情の塊が、そのまま音となって溢れ出した。それは魂からほとぼしる、少女の悔恨と絶望の叫びだった。どうして自分は、誰も護れないほど未熟なくせに、大切な親友をこの旅に連れてきてしまったのだろう。まるで黒い竜巻のように湧き上がり身体を押し包む、絶望の大波。

(逃げて、早く……)

再び、リンの口がその言葉を形作ろうとする。だが……ミズキは動けなかった。何もかも手遅れなのではないか、と感じた。そう、今さら……今さら、未熟者の自分だけが逃げ延びてどうなるというのだろう。イズルハも、リンも置き去りにしたままで、このままおめおめと逃げ帰って……どうなるというのか。

絶望が一気に心の堰を押し切り、堪えていた感情があふれ出す。無力感が、たちまち身体を縛った。だが……砂浜に膝を突いたミズキは、ふと頭上に、不思議な温度を感じた。はっとして空を見上げた瞳に、荘厳な光が映る。

(虹色の光……? こ、これは……?)

※※※

一方、ミスキたちが抜け出した大岩の間。ここではイズルハが、死招き蟹の攻撃を防ぎながら、整った顔に焦りの色を浮かべていた。

（くっ、リンが！ やはり “発” だけでは不十分だったか……！ なんとか、私が助けなければ……）

さきほど、リンが大蟹の鋏につかみ上げられた様子は、イズルハにもはっきり見えていたのだ。彼女は正面から何度も続けられる大蟹の力任せの攻撃を防ぎながら、その一撃の反動を利用するように、岩陰から滑り出る。蠢く青い節足の群れの脇をくぐり、イズルハは無理やり、大蟹の後ろに回り込もうとした。無謀とは分かっていた。だが、そうしないわけにはいかないと、彼女の心が叫んでいたのだ。だが、まるでそれを予想していたかのごとく、死招き蟹の鋏が機敏に動いた。

(くっ……)

イズルハが唇を噛んだ次の瞬間——その異変が起きた。暖かい虹色の光が頭上から降ってきたかと思うと、唐突にイズルハの身体を包みこんでいく。どうやらそれは頭上の空から降ってくるようだった。

(これは……!?)

驚いたことに、“発”にもさほど怯んだ様子を見せなかった死招きガニが、今は光の中、まるで二つの巨大な岩になってしまったかのように立ちすくんでいる。嵐も、いつの間にかぴたりと止んでいた。そして光の源を追ったイズルハの覇力のこもった瞳が、中空に浮き上がる巨大な何かの姿を捉える。空中に突如として現れた、その壮麗な建築物——それを、イズルハはいつか書物の中の挿絵で見たことがあった。

(あれは……テバの天空庭園!? まさか、こんなイースラの辺境に?)

それは、空中に現れた時に勇氣ある者に奇跡の力を与えるという、伝説の聖遺跡である。雲間を染め上げる虹色の光は、まるで神からの恩寵のように、砂浜一

帯に降り注いでいた。

その虹色の光の中で……ふと、さきほどまでイズルハと戦っていた死招きガニが、金縛りを解かれたように動いた。まるで、人が腕で眩しい陽光を避けようとするかのように、巨大な鋏を前にかざす。もう一匹も、それに倣うように同様の体勢を取った。

その拍子に、リンの身体がどさりと音を立て、砂浜に投げ出される。

(こ、これは……)

(一体……?)

(どうなっているの……?)

次の瞬間、イズルハ、ミズキ、リン……三人はそれぞれ、わが身に起きた異変に戸惑いを覚えた。ミズキとイズルハの全身を覆う疲労感が吹き飛び、心にはみずみずしい力が沸き上がってくる。リンの身体の傷が一瞬で癒え、まるで何事もなかったかのように、すぐに身を起すことができた。続いて、三人の視線が合った。それから同時に、あるひとつの想いが湧きあがってくる。

(今なら……やれるかもしれない！)

今この瞬間、言葉は必要なかった。リンの魂を込めた、氷結術の青白い光がほとばしる。それは二匹の大蟹に、氷でできた竜のように襲いかかったかと思うと、たちまちのうちにその巨大な身体を凍りつかせた。その横で、ミズキの身体が軽やかに宙を舞った。そして、イズルハも。空中でミズキの手が、イズルハの手と触れ合う。伝わる力……イズルハとミズキの覇力が一気に増幅される。次の瞬間、まるで青い炎の爆発が起きたかのように、周囲に覇力の光が弾けた。

「「やあああああッ!!」」

二つの裂帛の気合とともに、青い覇力を帯びた刀が、同時に甲殻に叩き込まれる。氷が砕け散ると同時に、巨大な甲羅がめりめりと砕け、裂けていく。口から凄まじい量の泡が吐き出され、鋏が断末魔のうめきのようにガチガチと音を立てる。節足をぶるぶると痙攣させて、そのまま、巨大な蟹は動かなくなった。続いて、もう一匹も。やがて二つの甲羅の残骸は、細かく青い霧の塊と化していった。それはそのまま海風に運ばれて周囲に漂い、静かにほどけて霧のように消え

去っていく……。

※※※

——そして、しばらく時が過ぎた。

「……」

安堵の想いは、言葉にならなかつた。三人の少女は今、砂浜に寝転がり、大きく息をついていた。見上げた空は、いつのまにかすっかり晴れ渡っている。まるで昨晚の嵐が嘘だったかのように、どこまでも青い空が……。

「イズルハ様……」

ミズキが、ぼうつとした調子で言う。

「なんだ……?」

イズルハも、息を整えながらゆつくりと答える。

「あれは……本当に起きたことだったのでしょか……?」

幻のように消え去った天空庭園。ミズキには、まるでそれが一瞬の白昼夢だったかのように思えて仕方なかった。

「もちろんだ……もしそうでなかったら、私たちはここにこうして、無事ではないるまい」

「やはりこの旅には、エン・ハのご加護があつたのですね……」

途中の社で出会った不思議な女人のことを思い出したらしく、リンが呟く。

「そうだな。そういうこともあるのかもしれないが……」

珍しく歯切れ悪く答えるイズルハの心中に、かすかな疑問がある。

(テバの天空庭園……そもそも、あれはエン・ハの力に連なる聖遺跡ではなく、確か光の精霊神たるヴェスに捧げられたものだったはず。それに、あの道中で云った怪しげな女人……あれはおそらく、決してエン・ハの化身や使いではあるまい)

ここについては、イズルハには妙な確信がある。彼女の身に宿る覇力の瞳が、そう告げていたのだ。だがそんなイズルハの疑念を、ミズキの現実的な言葉が打

ち消した。

「とにかく……まずは、この泥だらけの身体を洗い清めない」と

「はは……もつともだな」

くすりと笑みを漏らし、イズルハも、相手を崩した。疑問はあるが、今はどうでもいい。ともかく、三人は生き延びたのだから……。

※※※

ユキノ村と浜を一望に見下ろせる、岩でできあがった丘の上。ひとつの影が、そこに立っていた。その海辺の小村から砂防用の松林を抜け、街道への小道をたどっていく三人の姿が、だんだんと小さくなっていく。その人影は、黒衣と顔をすっぴり覆うフードの中から、その様子を見つめていた。

ふと、海風がそのフードを吹き落とした。はらりと肩に黒髪が流れ落ちる。瞳は海のように青い。その姿はミズキたちが神社で出会った、あの女神官のものだ

った。してみると長い黒衣の下には、さらにあのエン・ハの神職としての衣装をまとっているのだろう。それにしても、巫女の衣装の上にわざわざ身体を覆うかのような黒衣とは、多少ちぐはぐに見える。不意に、声。

「よろしいのですか、ハイネスお嬢様？あのまま、あの三人を行かせてしまつて」それは初老の男性のものだが、どこか愉しげで、少し、相手をからかうような響きがこもっている。女神官が少し顔をしかめ、黒衣の下から右腕を抜き出し、そちらに視線をやつた。

「わざわざ『テバの天空庭園』を貴重な予言の詩片から呼び出してまで、窮地を救つてやつたというのに……。恩も売れるときに売つておかないと、何しろ人間どもは恩知らずですからなあ……」

驚いたことに、『声』は彼女が右手に握っている杖から聞こえてくるようだ。よく見るとその杖には、色とりどりの魔魂石や特殊な呪法と思わしき装飾が施されている。どうやら、古代王国の魔杖であろうか。

「かまいませんことよ、ガルケー」

お嬢様、と呼ばれた女神官が応える。少しばかり微笑が含まれた声音だ。

「その度量の広さ、さすが『ザインの使徒』のおひとりだけのことはあると申し上げるべきですか？」

ガルケーと呼ばれた魔杖が、にやにやした調子で言う。

「あの者ら、正直あの程度の魔物に手こずるようでは物足りませんが、かといって見殺しにしてしまうのも惜しいと思つたのです。もし彼女らが本当に我が眷属となるにふさわしい魂を持つのなら、運命の導きにより、必ずや再びわたくしと巡り会うときが来るでしょう。わたくしは、ただその時を待てばよいのですから……」

「そういえば、お嬢様には運命の指し示す先が視えるのでしたな。このガルケー、うっかりしておりました」

今度は、多少の追従を含んだ声。

「いいえ、わたくしに視えるのは、ほんのぼんやりした不確定の未来だけ……ただ、その幻像がだんだん固まりつつあるのを感じるのです」

「ふうむ」

ガルケーが今度は感心したようになつた。彼が仕える主——紅眼のハイネシアは、やはり“ザインの使徒”の中でも十分に上位といえる力を持っているようだった。

「間違いありません、聖刻の書、クロノグリフの頁数は、確実に刻まれつつあります……いずれ、我ら“使徒”は、この地を統べる精霊神たちの運命を示す記述の詩篇すら、扱えるようになるでしょう……」

女神官は、静かな声で断言した。

「ほう……」

魔杖は、しばし沈黙した。イスラの沖から吹き付ける海風のごうごうという音だけが、周囲を包む。

「……しかし、それにしてもお嬢様も人が悪うございますな。あの大蟹どもを、あの者たちの力を試す捨石にされるとは」

ぽつりと、魔杖の声。今度のものは皮肉とも取れる声色だった。これには、さ

すがの女神官も、少し不機嫌になったようだった。

「ふん。もとはといえ、あのちつぽけな漁村の者たちが悪いのですよ。こともあろうにわたくしを、あの怪物を操る卑しき魔物使いなどと見誤るなど。あの大蟹に住処を荒らされたのは、当然の報いですわ……！」

彼女は眉根を寄せて、不機嫌そうな声で言った。すると、魔杖が小さな笑い声を立てる。

「いや、ごもつとも、ごもつとも！ ですがこの地に降り立って早々、あの大蟹の縄張りを覇力の気で荒らし、刺激してしまつたのはお嬢様にも非があるので
は？」

「ガルケー……わたくしは、知らなかつたのですよ。わたくしがこの地に降り立つたというだけで精霊力が乱れ、あんな嵐が巻き起こるなどということは」

「まあ、そうでしょうか」

「さすがのわたくしにも、予想できないことはあります。それにわたくしが行なつたのは、支配の術を使ってあの化物をなだめたというだけ。……それともお前

は、このハイネシアが、あのおぞましい鉄で切り裂かれ、あの化物蟹の餌になっていたほうがよかったとでも？」

「いいえ、いいえ！ 滅相もない！ ただ術を使っている最中、お嬢様の真紅の瞳を見てしまった、あの漁夫の顔がどうも忘れられませんか……まったく、偶然とはいえ、あの恐怖に引きつった顔といったら！」

魔杖はくつくつく、と思いい出し笑いをしているようだった。

「まあ、わたくしもあの滑稽な姿を、少々可笑しいとは思いましたが……」
こちらは言葉とは裏腹の、ぶすつとした声だ。

「ただ、仮にも未来の創世神候補であるこのわたくしを、あそこまで恐れずともよいでしょうに！ しかも村に逃げ帰ってから、あらぬことまで尾ひれを付けて触れ回るなど！」

まったく心外だ、とでも言わんばかりの口ぶりである。

「まるでジュデクの岩屋で、奈落の邪神にでも会ったようでしたわい！ まあ、村人たちに危害を及ぼさぬようあの化物を追い払うことなど、お嬢様がその気に

なれば造作もなかったでしょうに。彼らもとんだ貧乏くじを引いたものですな
……！」

魔杖は、思い出し笑いをこらえきれないようだった。それに対して、少女はま
るで苦虫を噛み潰したような表情で、言葉を紡ぐ。

「自業自得というものです。本当に腹立たしいこと……わたくしはこれでも、可
憐な乙女の姿を取っていますのに！」

今にも地団駄を踏み出しそうなくらい、感情がたかぶっているようだ。ふと、
再びその姿に変化が現れた。黒衣をまとった女神官の身体の輪郭が、一瞬霞に包
まれたようにぼんやりと揺らいだのだ。魔杖も目ざとくそれに気づいたようで、
主人に注意を促す。

「おや、変幻の鏡の効用が切れてきたようすな……お嬢様、あまり心を乱され
ぬように」

「ふう、この変化の術も、効果を保つのは面倒なもの……どうせこんな辺鄙な場
所で、人目を気にしても仕方ありますまい。ええい、いつそのこと、変化術など

解いてしましましょう」

「やれやれ……」

下僕の呆れ声を気にするそぶりもなく、少女は大きく息をついた。

「……やはり本来の姿のほうが、気楽ですわね」

黒衣はそのままだが、その下にまもっていた幻影の衣——イースラの女神官に似せた偽りの服装は、すでにすっかり消え失せている。代わりに、彼女本来のバストリアの魔術師たちにも似た異装が、はつきりと表に現れていた。

黒髪はいつのまにか流れるような白銀色に変化し、浜風の中でたゆたっている。その銀色の草原の中、形のよい耳にほど近い場所から、いつの間にか短くねじれた角が二本、生え出ている。角の色は、炭を塗ったように黒い。

同時に熟れた苺のように赤い唇から、まっ白く小さな牙が一对覗く。そしてその瞳は“紅眼”の二つ名の通り、赤く燃え上がるような輝きを放っていた——
“ザインの使徒”としての本来の姿、ありのままのハイネシアの姿を示して。

「さて行きますわよ、ガルケー」

「かしこまりました、お嬢様。して、次はどちらへ？」

「あの者たちだけでは、まだまだ心もとない。このアトランティカの地は広く、我が手勢に加えるべき英雄はほかにも多くいるはず……次はこの地の北西、噂に聞く尚武の地・ゼフィロンとやらを訪ねてみましょう」

「承知いたしました。そうと決まれば、ほかの使徒どもに先を越されぬよう、急がねばなりませんまい。最悪、英雄たちの『魂の記述の詩片』だけでも、手に入れておく必要があるでしょうからな」

「そういうことです。さあ、参りましょう……！」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、丘の上を一陣の風が吹き抜ける。そして次の瞬間、少女と言葉を操る魔杖の姿は、かき消すようにイースラの地からなくなっていた。

【了】